

大垣君を偲んで

中村 宏

大垣君の訃報に接し、大江健三郎の「万延元年のフットボール」を思い出した。遠くアフリカから届いた旧知の、少なからず尋常ではない訃報から書き出された小説であったような気がする。白浜も田辺もアフリカほど遠くないはずなのに、それほどに距離を感じてしまう今日この頃がある。

いささか私事となって申し訳ないが、忘れもしない 1985 年 8 月 13 日、私たち家族は、学部から大学院時代の 10 年近くを過ごした白浜臨海の地を後にした。オーバードクターの生活のとば口についたところで、先の見えない新しい生活に向かうべく、まさに泣く思いで臨海での生活を振り捨て、思い切って新天地に飛び込もうとした。幾多の困難は覚悟しつつも、実際に大病を患い、予想以上の生活苦に喘ぎ、職の展望のなさに絶望することになろうとは思ひもしなかった。あの日からもうじき 30 年の月日が経とうとしている。

虎さんや原田先生の訃報に接した際には、それなりの覚悟があったものだったが、若き（と、自分には、いつまでたっても大垣君は若きであり）俊英、大垣君の訃報は、正直こたえるところがあった。とうとう、自分の青春のあった臨海の灯火が、これで本当に消えたような印象を受けたことを否めない。つらいつらいオーバードクター時代、自分の人生の大転機になったこれもなかなか大変な民間企業時代、そしてとうとう 40 代の後半でまさかの思いで箱根の峠を越すこととなった現職へと 30 年の歴史の歩み。自分の生活の激動の中で、いつもなにがしかの灯りをともしてくれていた、青春の白浜時代の、いよいよ（誠に大げさのようだが）終焉にも感じる出来事だった。何とも慚愧たる思いが拭えない。いやはや遠くへ来たもんだ、と独り言ちてしまう。

大垣君とは、いささか変な縁で、臨海に来る前に見知っていた。

私はろくでなしで、大学の 5 年になってやっと体育や英語（英語は 6 年で！）、あるいはドイツ語の単位を取ったような人間です。今時の大学では、そもそも 3 年にも上がれない（本学の場合はそうです）ような状況で、私は若い後輩たちと体育授業にいそしんでいた。確か、そのときに卓球の相手になったのが、そのころから俊英の印象のあった大垣君との最初の出会いではなかったかと思ひ出す。そもそも、自分はなぜ大学院で当時最激戦の海洋生物学分科の白浜を望むのか、と言う問いに、あそこは海が近くてきれいで、温泉がよくって、メシも酒も旨い、と、およそ探究心に燃えた大垣君に語れる知識も思いもなかった自分が、今考えても恥ずかしい。

40代に入る直前に、研究者としての自分の力量のなさに（やっと）気がつき、これからはコンダクターの時代だとうそぶいて、研究開発事業のプロデュースに自分の才能を見だし現在に至っているが、いつもその対局のような大垣君の存在はうらやましくもまた誇らしくもあった気がする。今、東日本大震災という歴史的な事件に接し、改めて、残り少ない現役時代の最後の仕事として、被災地の海洋環境の保全とかの地の復興にいささかでも貢献したいと、久々に海に船を出し、現場の調査研究に戻ってみた。鬼籍に入られた大垣君に、なんとか恥ずかしくない仕事をしたいと思っている。以上

（なかむら ひろし・東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科環境保全学専攻）